

## [125]語文研究表紙奥付等

<https://hdl.handle.net/2324/2544326>

---

出版情報：語文研究. 125, 2018-06-09. 九州大学国語国文学会  
バージョン：  
権利関係：

## 《會員著書紹介》

叡山文庫調査会 編著

### 『叡山文庫 毘沙門堂藏識語集成』

本書は、叡山文庫毘沙門堂藏の典籍類について、奥書、識語、書き入れ記事等を調査した上でまとめた、叡山文庫調査会による第二冊目の報告書である。

本書の構成は以下の通り。

序

凡例

本文

索引

叡山文庫は、大正十年（一九二二）に伝教大師最澄千百年御遠忌法要の記念事業のひとつとして、教理を授けたり自己を切磋琢磨する目的で活用され、山内の各寺院に所蔵されていた法華経・天台密教・摩訶止観・円頓大戒の四宗にわたる数多くの典籍・記録類を蒐集整理した、いわば仏教専門の総合図書館ともいえるべきものである。

昭和五十八年（一九八三）五月に、老朽化した建物を立て直した現在の叡山文庫が開館された。その直後である同年八

月に、叡山文庫の書籍を悉皆調査するべく、故新井栄蔵氏の発案により発足したのが叡山文庫調査会である。新装された叡山文庫にはおよそ四十の蔵書があり、総数約十一万冊の書籍が収蔵されている。内、約九割は仏教関係書であり、さらにその仏教関係書の約八割を天台関係の貴重な書籍が占めている。調査会は、天海藏、真如藏、毘沙門堂藏等の著名な蔵書に取り組み、調査を進めてきた。その結果としてまず平成十二年七月に、天海藏書の調査結果を『叡山文庫天海藏識語集成』として編纂・出版した。本書はそれに続く二冊目の報告書となる。

本書の調査対象である毘沙門堂藏書の所蔵者であった毘沙門堂は、天台宗の門跡寺院である護法山安国院出雲寺のことを指す。京都市山科区にあり、大宝三年（七〇三）文武天皇の勅願によって創建された。本尊の鎮将夜叉毘沙門天像は最澄作と伝えられている。その後廢絶の憂き目にも遭うが、天海大僧正の弟子、公海が寛文五年（一六六五）に山科に復興させたのが、現在の堂宇となっている。このような由緒ある門跡寺院である毘沙門堂旧藏の典籍類は、鎌倉時代から江戸時代まで及ぶ。このうち、内典（仏教関係の書）千八百八十三冊、外典（仏教関係以外の書）七百九十一冊が存するといふ。これらのうちでは、『阿婆縛抄』『白宝抄』等の密教・天台学関係書が重要な位置を占める。また、歌集、法制資料なども見られるほか、『三大部述聞』（南北朝期の写本）、『日本

書紀』(慶長版)などの善本も多い。

本書は叡山文庫調査会の手による地を這うような長年の調査の結果である。網羅的にまとめられた奥書、識語、書き入れ等からは、鎌倉時代以降の寺院や僧侶がどのように活動していたかの知見を得ることが可能となるはずである。

(平成二十八年十月 叡山文庫調査会 A4判 一五七頁 三、〇〇〇円+税)

古川初義 著

前田桂子・門屋飛央 監修・編集

『長崎県小値賀町藪路木島方言集』無人になつた島のことばの記録』

本書は、長崎県北松浦郡小値賀町藪路木島の方言集である。本書の構成は以下の通り。

序文

紹介の言葉

藪路木島紹介

方言短歌

藪路木島方言集

藪路木島(やぶるきしま)は、小値賀島の西方約四キロメートルに位置する島である。一時期三十六軒の戸数を数えたが、昭和四十七年に最後の島民たちが集団離島して以来、無人島になっている。著者である古川氏は、この藪路木島で生まれ、離島するまでの約二十年間をこの島で過ごした。無人島となつた故郷藪路木島の言葉を残したいという思いから、藪路木島方言の収集を三十年余り行い、本書に収録されている語は約一万語にも上る。その多くが著者の内省によるものだが、同郷の方々にも確認を行っており、正確を期したものである。

藪路木島方言集は、五十音順に整理され、動詞、名詞、慣用句などの項目の下に訳と用例、補注が書かれており、動詞・形容詞は細かく活用形を示している。例えば「歩く」という動詞だけでも、「アイブ(歩く)」、「アイバンセ(歩かせて行かせる)」、「アイベ(歩け)」のように様々な活用が掲載されている。また適宜記された用例によつて、細かいニュアンスも知ることができる。方言形の表記はカタカナでなされており、オ(○)とヲ(ow)を区別しているほか、現代ではほとんど聞かれなくなつた合拗音(クワ(西瓜)、音の融合現象(カメハンズ(瓶飯銅))などの音の違いも注意深く記されている。

本書には藪路木島の方言で書かれた二十首の方言短歌も掲載している。この短歌には、藪路木島の言葉でしか表現でき

ない当時の島の生活や文化、風景が味わい深く詠まれている。本書は、無人島になった離島の言葉や文化を後世に伝えるものとして、民俗学的な価値はもちろん、言語の歴史の変遷、隣接する各島々との連続性や本土との違いを知る上でも貴重な資料である。

(平成二十九年十月 古川初義 A5判 三三二頁 一、八〇〇円＋税)

白石良夫・中尾友香梨 編

小城鍋島文庫研究会 校訂

『佐賀大学附属図書館小城鍋島文庫蔵

十帖源氏 立圃自筆書入本【翻刻と解説】』

本書は、野々口立圃(一五九五～一六六九)自筆書入本『十帖源氏』(版本)の翻刻と解説である。本書の構成は以下の通り。(『十帖源氏』所載の卷名等は割愛した)

まえがき 白石良夫

凡例

十帖源氏「書入・版本」

解説——異版と著者書入本 白石良夫

あとがき——著者書入本の周辺 中尾友香梨  
校訂者及び担当巻一覧

本書の底本は、佐賀大学附属図書館小城鍋島文庫に蔵される、立圃自筆書入本『十帖源氏』。該書は著者立圃の手沢本であり、小城藩第二代藩主鍋島直能なおよしに親しく献上され、やがて小城藩の蔵書印も捺されて今日に伝わった、等の来歴をもつ新出資料である。また、底本には立圃による墨筆の書入れのほかに、他者による朱筆の書入れも存する。

本書の大きな特徴として、翻刻における濁点の処理方針がある。例えば、まえがきによると、版本『十帖源氏』には、次のような違和感のある濁点のまま見られるという。

君かじ、まにまけぬらん(末摘花)

傍線部は、無言という意味で、国語史の知見を参照すれば、「しゝま」とあるべきところ。しかし、同時代に宮中でおこなわれていた源氏音読の資料『源氏清濁』を見ると、第一音節には濁音符が、第二音節には清音符が付されている。よって、版本のこの濁点は、版下を書いた著者立圃による単なる誤りではなく、意図的な濁点である可能性が予想される。こうした例が、ほかに「でうど(調度)」「なをくじ」といったように何度も出現し、また朱筆の書入れ濁点についても同様に当てはまる。したがって、本書底本の濁点は、近世初期の古典作品の読み癖の意識的な反映であると言え、こうした資料

の特性を考慮して、本書は「読み癖に配慮した近世擬古文のテキストの再現」を試みたという。

また解説では、『十帖源氏』の成立年ならびに刊行年について、従来の説を大きく訂正する重要な情報が立圃の書入れ中には含まれていること、および覆刻による異版の存在など、これまでの『十帖源氏』の版本研究を大幅に修正する指摘も備わる。

さらにあとがきでは、立圃が『十帖源氏』を編纂・出版した目的に関して、従来しばしば言われるような、難解な古典の源氏物語を当時の婦女子にも理解しやすくし、広く普及させるためのダイジェスト版であるとする捉え方を否定する。代わりに、『十帖源氏』は「基本的には俳諧を嗜む人のために提供された参考書またはテキスト」であり、その想定された読者層は源氏物語の奥深さを堪能しようとする「文人」であったという、刺激的な説が提示される。

以上のことから、本書はこれからの『十帖源氏』研究を進める上で、必読の書と言えるであろう。

(平成三十年三月 笠間書院 A5判 四〇三頁 一一、〇〇〇円＋税)